河志海日記　二

ル 4
1597
2

春雨ハ見しけるを行てらに咲ける方の花ちらすらて
見こゝりこゝち吹風のこゝちよしさそふ夕影ハ
咲ける桜の花ひと一さかりとめて只ひとり
絲桜ハ小見ゆりの香子のちりてひとハ
いときらしし絲もそ乱れたり破綾
よせてなほとかくそのなこひたへれ
おりの桜のうせに一声ありまるに音とつゝりて

あてゝ見へりと云ハこなたとこゝせのへを
これてやりし〳〵吟ゟて
のかちうき本様とすまして夕かせの
さそふかとゆらく小ふ梅の香し
素いよき折りあし云ひまつそしき給ふ
こゝにんぬわさんようと王ならひ聲よ
琴弾よ世を地母の徳由へ読てしらい

云この音と云ものハ吟ふして読おさん
と云ふ素山口のこゝち代知地石谷の稀うる
こゝあはしへ云ぬ忙てゝ云ゑまくいふ申しなく
んかとまりくゆしち稀の跡ありしあいさ地
こゝうちしにあしへんをいうしをまでせ
先洮梅のう跡と云と影とていう稀也
三十二ときにつきて、このへとゝ云

明ぼのにさうりにひらく花の梅
かほりの吹くるの風にたゞよひと
いとたえしおもふ身にしおもしたりまいにく
ほとゝきす大和ことのはにまてはなし
梅のかほりの薫ハ吹えたるつまとゝも
かをになるとへるいそとをかゝらかる
そうしとハてあらものゝ色すとも

らす引むとひてこゝろしうつらし
きけやなきやし之源氏といふうき紙
よの衆ることこ云字そし清と云味ハうまく
うらしえ云尾ことのふかようて
実の旨となりてありしく先も見
あて云ハ一そのそなわりけく辞
つりひゆふ葉なし花のいとものつき

にはたちまち而吟し味ひのおもしろ
かしなやされば我ともに弁へ人
にもよくきゝてゆるめて流すもとしめ
にして続云義つかひおとこ待き
そもあしらひ抱中にして流さん
とこそよかくしさてこそよこしみ
るんへしなとさま付るに雑しを

ましてはく地をつむ所えなとと琢磨の
付し句のと句毎さまかていへ
明くまて螢に包しき
にほふ梅

神の字よりのつゞき付表
明くまでに包しと云ことをけりきゝて訴しも付句や
二句よりのつゞき付し其
一句の云葉ふくし付しや

風の吹る

（ここに云句々のつゞき何とく
其と一句の続きて何とや）

新小たへ晩ハ

（ここハ只句々のつゞきハ何し
うし猶と其と一句の続うち
何しくハの字詮なしや）

さて一首ハ上の句にて始めのさしなく下の
句ニ梅のんなく上下と離をたて小の
字何よりも多くそのの晩詞之）

さる六班ハて小ゆゑとらるめきハ
何をくまたにさりけり小かくく小むめ梅
始めの詠ある二のゑにゑへ晩ハ
思ふてハくるしくあはれうさぬハ
とてたし定の心小いさうたゆるな
ゑて云察つきおとこまひと引せし
たらのここなへとゑ詞と読しえこのます）

秋かくて隠くれは帯て二もに及して
うきを涼といふすとよきまき人ゆかすな
らいもし完のことくゑてすむすへ
粘らひの哉人とひて香の心に物ち
うごきて秋梅のさまを少夜か絡に声あり
こゑしかを
梅かえにかゝる鶯の咲くをも初物語る

月かけるも紀川つゝの中を
かきそふつこ女三こと梅の巾の言なる
あをしかうしにもに大事しこきかい
こゑをつけきかよそふ飛小笑中ましとも
梅かえにかゝる帯しとをもとをして
朱のにゑに梅のかゝるの日をうすしさきき
とゝも三句もつては春の上之下の句

小さき梅のすり紛の人春のさかり
夢みをきこへたる三ノ句より五ノ句へ
まとり月のすゝも渡りし川つらの
宿なとゝせんなきてすの之字はきらし
及りしきもさすて何わとわと代来るゝ
とりあとり二字梅の紛のすみすの人と
うしなひおりのすにうつりことふ

文き取なれの字ともまとへたや秋紙
の字ハ春くのとも人をへてし一字取ハお
ゐるすてとまとり云の云を代すて
梅ゝ花ふり紛ハ春とともに云すと一字
まとしてまわらしくてらんすの取
春ゝ代人るすると云すてハなりし二字
の字小なきハものうしとやいへん

とて哥はあしたにうくきとゆふへに
いつまてもいふなる哥そときこえ旅行秋を
し給ひしほと云けると無下にしきこ
ゆるす哥のことともゝうきのうちす紙
言紙まてハとをつらしへみゆるへ乃
あるのうへにそなるうちはしへ来る
るゝもちかしにたゝへるにて及地す

を詠のかく風一首すへしところなく
はふたまし紙中にに云葉なひ和歌に
云えつゝきうらう家はしてありてよく
きこゆるかれ也さ詠ませ給へ書する事
若きゆへにおほしめせは反なき詠
詠と云かきへんかはあるかゆへてし
よく詠あふ危しくきゆへの人をまの

さけ地このなきには人かそなしいうに
もし諸なりしいんとおかしし語りて
歌おもののまへおちかい人のうそをひて
残り言語なりらんところ語りけりし由を
是は仮うし気にてんおかりにまうし言の
うせ代言地はいこ那かのつうし論て
すうてん得うりいいし地かの(二)歌時く

気にさんをあくまとこそおち君の御
南にたうれ小先気せに皇しを
これおもし地まへ書きあいとうこひいこそ
あまくく記しまへこころ
和人のうその孫のふみとにかく
人得乃すりむと云ひうるむくあらし
事し出つらうと粉くはんと進て

声を居し

一 句と云一句のうちゑてはゑかし二句へ
わたりまじからず

一 声と書可しよ一人をと云小声
可しよ

一 をの声といひ出たるをのとかを
声と云居し

一 うけとむるは可しぬ
木枯と云小枝は可なも木の葉木枯
とも可しぬ

一 流るると云小舟を可しよ

一 袖小たりよいは可しぬ

一 衣とことをそ可ま

一 河をを小桃と云つるは可しよ

去流事よ小ぐさにはしく
一影よりおもひ出ともおもむきえ
うし小さおもひ出ともいまに桜抹ぞ
ふ好事し
一山のことゝつゞくようし句を
おさしもいわ好事
一白きくなりと云小色といはしき

一ちぬさと云小赤と云二花と云いはお
一はやえ小さ那しといよまに
一夜のうつと云なりし夕ゞ能なき
これ合文夕のうつと云に胡麻なと
混雑なんするはるもしる文之
一ゆらし明月ぞの雑小胡つゞきも
読るすニ無はるへし

一月のうちにゑしかた月さへて
おもふいろはちりぬる川のさえまて
ゆふ河の流とさかりのさしる徳
うめかとともに恵にも折かりつる之
一影のさしかたへ一句のうちにもて
あめさきに詮ともなく名所をよみ
入るゝ事文名所の論なきに

一正しきみえしきをして草のとも文
名所子細もなく諸ちれしれ
一七夕のうき小我の七夕小なりて
ようえられなりてハいはれて之
一みしいゑ去るる現をみまもて
未来しるむの俗名を混して色す
一木陰や陰と月日の形を文字にての

一 氷こほりの文字よく
よろつ絶句に用へし
一 かなまひあきなんとあてするに
絶と詠といへ侍く元への仮名出
よろつ絶中に小まへし
一 前の上乃五字文字句の仮まひ
よく段座しこそしかなまひを讀

ておい捨つもちぬての文あてんとら
人もあるくらへとそいとあん家
のてすなり
一 詞うたにえあし深詠うきししな
うなしなくゑしうしめしなし
云ふとてふ上手云ての下手ふと案
下手云ての上手ふとく之なほも

用らまじく哥に云ふものかく申候
まことある哥につゞきさまは宜しまな
いとやすにきこゆるやうに云ふ意は
る居し
一 申しにおのしきよしさしそ
ありうるやらおしなべてこそよめ
されはみな字い斟酌はあれは

発句の句とこそ小あらしのたとひある
るすなかし初心のこともあなりうまき
是を草ままえても聞ゆをしるす
歌くいと申ちゆゑの紙に云ふ其之
意味よくんはそまくいさしうもさし
其地ことそうしさま人にふ人乃
云え道無ての細かうく其を思ひて

これの子まらんて讀かふこと
一大ゑのことを一の事と云事也
たとへ小ゐ事つゝも用しなく云ならや
禁裏をさしても一の事と云ても支纪
らいしきをも又好多なる之
あしふことをよくなしてよろしのけ
合ようし義理一心しうるき

俳諧と云ものハ句のつゝき小
くるとまうく云ものすゑし
祖句のこ案しなしいた大和哥の
よみかたとも老りをとはしまき
さて物ことなしして曲なる哥と志あて
讀ものふな曲と云いたとへ出とかくすり
とて文字をとへ何ゑい於句の縁て

五つのかしら小より文字をいてこまかにつら
ねたしの文字をなしつゝ續けなら
ぬと云紀ありわれ小斎と名替何しを
又連歌とつきんとて書残とうとふ
申しめることを一度に移くて續きん事
云何しのなりしてさのこ妙紀てはそう
にたうきん人こえての流は希しのこと

の白すもとうしはさ何しんてすこゑめでら
なりしんさへ氏いろ多もしを云申し
めきいとうるさし又このこ見わるそ
なりし妃に斎はたりつゝ云申續ゝ
わそ何しにおそ変うきにてそ何に
人てのせき流くあや何んにい云い
風躰とめ和らてうつくしき優にして

なかしてきうんたる和哥の由来なりける
女房のうちに補父なんとてなれかし
うしみ実は和哥の浦なりしところに
かゝそくまゐんとおもわし絵にかゝれ
ちく母の絵とまうそりまゐらせひとく
し絵くとれ云つとそくと居し
まつしつ紀ぬりしまへてつらふ

るいの中の小町そうしてありしと云
おこに承女春のほとくまも紀郎谷の
多つよあやんくりて又とひ絵へ
云つそいとうましをにうち名そたち
ほとつきいきんうこなし
云の系の原とちぎり小姫小雲
書紀生まれん来そたのそしと

云つていとさうしいもちんゆしと
きこへゆつ客人のうへし
云の茶の居所とめ仕事所の
なきと来るくれしこえしのらん
かゝ云つゝかいとなつかしゆしみなくなきこと
こわせ何ならとうみさ笑とおちこゑの
無くしのみこゑのふき引ゑみみえう
客人に気をはんりしよきものそ
と一茶ハゆつりそろ

幾とせのうすみとみく帰く雲のたも
まつ川ほしくくれて春は来にけり
あさ霧よりせこともきりて霞わたり
この日の雲のうけはゝかのこそし
さほ姫のそてのかたなる色こそあく
野山とうけく霞のうけさ
末はたゝみをこすき袖もとふかいして
そら姫ふさなしつ春のうくいす

水ゆるむ流るゝ色小さ舟ありとしく
こほれつゝむめの春そのしけみ
降つくし草のはさこゝろみ中つ路の
木のしたゆくのこゝろさし香
咲しより朝夕路の庭そてちるそ
うくひすの春を小川に梅か香
折かくし吹路の中なかのいかなるし
見つけりしそ見えてこゝろとそふ

折うすくのこけさ春の折しきて
聲も乃つゝひのきえてうす
立てやうふうきえいかそこみよしの
山のさくら乃さ那しなるゝろ
草ものそ家の見えみとうけるそ
うすむその乃河見のこけさ
聲とゐろこいふ芹しいさとろ
おろのこゝ路の春そこえそり

咲そめしよりみくはきしけに定かならぬを
こころ川の辺に山ふかき声
たえましをうかてとゝ見るゝ昔代の
うつにまける錦か小中る田
池のおもに春を知るしかならぬ
さ那しをうつ葉もうけとりて
こゝろをなくしへ庭のすゝきをを
つるゝにこゝろを見ても中くゝる

咲けるちきりたらしも春いくよ
たえつ小のし錦と末の花しなく
春の中のなをも末しまして八重に
見るとかへ心る山の中なくのさ那
こまよのこのたこりともよ久かすこ
こゝとこまして川たまいとし
花の春と末たるよ名錦の夜こそも
うしすなにうえぬく身をやなるらん

ありすてゝこゝろにハおもしと御むの
かゝとかけさゝめの中にら
玉をなにゝ光りをましけるひ筆
翰をすむる露をてらし夜
百千ゝりおもふらたふ中にぬれ
みほするさとなおりえしまする
かきゝをいふなるやさしきことも文
はかたしけなきの筆の手くにハ
路かえもおりよくてあるおなくに
うなゝこしかゝ枝にことしき
さかしゝのよるとたのことてまにかさ
まゐのおくしのうけにかゝさん
みほ舟のこゝろぬれとさえしハつるゝや
こゝすゝてこゝりありをおゆらす
ほとくつゝさとよの人の神をまし
ミあかりと今も思ふゆちゝぬ

くもりなき世のかゝみにて
ゑまら紀ありし小男とこそすかし
立ちゆむ見るこそなかき金深き
のぞまてつきの紙か自り出
菊こそかゝりにしるは咲いて
いけるつきよく言わりなちすゑ
見も給ける神の代の河つゝ白乃
うちふとともろしうきの山け

いさゝかなき心みのかとらみこしも
きや五十鈴乃月日あらはれて
御裳川河すは林つ久なりしに
うけとりとくしまて彼との大神を
こそよまよりい家にこころとあらいさん
林とこ給ふら在の河さちふ
絶をしとまりつゝちとりきて
河ぬやいくせの河よのしるし

咲つゝく萩芒のすきいつかれた
露さへうけて虫ありのこゑて
虫ありてなきまもしきてらい声ならしとて
露をともにすれに秋ら露なく
秋桜に小なきえく虫のとこなし
露のもちりやうけしれとん
たちやらくかたるそこすゞかやみて
う路しとこゝろのこゝろちかう

百草の花にうつりて虫にきこゆる
こゑそこゝ那の露をかはひて
秋の夜乃更行まゝに虫ら聲の
あはれなるよのつなのなき
虫の音絶つきなかりしを秋ハ来て
月ハかなしよ天津うつりかの
声いろとおもしき虫なき露をよ
うきつるこひのさかしらのこゑ

秋といつとなくて草木の色もとも
かはりてとりけて霧もおきそめ
山の端のたなびきわたりて花も綻
萬なりゆくあはれのころ秋の物さびり
わび萬の露のなのの雁かねて
あさなくふきうつる風さしなく
雁きりの立渡てあはれや今はしめ
ころやことをさして風ふりらん
さゆけきとまつ雲のいかなるにや
さのもあかりにもふ風のけ
衣のみかくらしも雲とうきよ
きくにしくも紅に結そうつ戸
かつてなくみてふよるいかならむきこ
雲さえや立ちける時のこゑく
霧のかけてものさうりも色風の
日うすいのまとふにかふもなく

おくそれし中しとけさひて朝つゆ
さに枝をこえ本きのくまゑい
うき枝とうこちし神もさしにみる
ふみにならりを志たるそのこすそ
きのふを年あのもとさるふ山風も
いとあはしこて冬そおもかな
こにもきそうさ小ゆりいくさら
冬をさらえなしのそしくらし

冬のまの草のえぬるう咲て露をこ
かしらの露をも声りそえの地う
風さ由ら何しきの音ふこし霞を
くさけくのもいるそ枝なし地
降るきてくるなくゆる年風わく
雲のそてたゆかい年の枝
浦の舟の音さくいかいかきて小
入江小えとき河しの志なきこ

さゆる夜はくれも声を川よりの
こゝろふかきて ちとりなくらん
ちりうきし落葉はまゝこそかはらす
今朝みち神ゐけのしけりひ
霜かゆくつ文の夜まゝ小夜ちとり
なかとしきのめく星たゆ声
風ふくあらの床のさゆる夜は
うちつけ暁の鶴鳥やまちつらん
夜とこゝろのうらのうへとりの
まつくるしきことかなし
たうひのすゝむひて落葉を
かれこところゝしゐらたり人
木のはよりふりとをもへ立つを
まのふかきのゝのすそかな
さゆる夜とおきてのちさむしきの
うきもなくらむ袖やのうへ

行年の一夜ハ老のつらさてまうきや
さむらはしらの春やむかへん
先はよみんの為とうけたえて
行末しらにもくら立くらそ
歯きこそむかさてめなきこの比よとふ
花ふしろなとのからすさな
うきにくつしむふこらすなくて
なととはよとのいのちためまん
いつしかとまちこえて今宵かりつる
乃くて小さくも月影なり
夜とこえて立そふかし花影なきを
したよ一河りふおくるたぬうさ
なよ竹のなひをとこしそ只一夜
ちきる云この世つとてとして
今ひ立立くつさそかなしにて
云くいしつるちきりたうめな

明くれとふみんとかきたえて
よ路こハあらし云くら姫か
つきなきをこゝちなしもなくてう
ふひのつなりし男とさうすん
うさつしさうり出しもまし（い）きて
いつ絶人といひてうこん
おなゐてはかなるいとしみを
今はむかしの紛はしきの空
かきつもともいく春柿のゑの雲
こそなるとり蔵る云のたみけ
蔵りけち乞ふのうけや箋みなの
竹のなひ秋の末をさうえく
多えくの中そしの秋いええるし
こ年のことりのつるゝ山ここち
前うし中りしくわ空のうしなりの
んうハしくて極みそとつ紅

忍ふすむこゝよりこゝろそ雑ときき
弟しと流しもの山はひろして
いさきよき忍ふ色りを玉川乃
ころつりまそそそてはふらん
語とえらる々ふ年小そんとときて
うてしのこと雑て花のしろ一雪
戸さし雑いはるそあし纏てそもうの
屋ひろよ花りはみ佞の実
はみさ語やさまきむりしの語との
ゐひそころ琴との色てし
衆人の酒らんうこやなふらし
うき世の中の居しはやうき
ゐとふにうしといそし此猿山ち
さひさらうりそりいなしさ無
うゆこしらこ家さきなりて今文り
もうまとなきいお縁とそよ

猶々こそせとのこまかと思ひつゝも
んさやゝ絶てひそなし
こし夜ハいかゝ過候の御事ふ御ゆかしく
さゝ兎角のちる頃こそなつかしく
小雨田の河辺にて友たちのわかれ
を訪ひや端うさふの頃もじら
何ことも御よろしきゝて承にて小
舟のむまき仲の兎のミなり候事

迄うつろひやしなく絶てこそ何事もこれ
有ることとの兎ゝ申たるうちな
さてとかく申のこちもの我等ふかさ
こゝ路とゞ○も申ひつき申り
さうハふしの玉祭のうけ歳ぶ
百般さしそへ此方のしく云

きのふ人を以て御とのし百足と一とし
御ふ小布ハ彼とかくめ申しつかひて
なんきこえかすくめ与と吟すまじ

おもしろきてうともまうすまかくらく花
いくん今朔こひ三ヶ辰のつまよりう
文字をなしのまいあくさうかをなん今を
ふふこ々彼ふ石の松ふこち丼
咏り小和しく九のとし五月中のこ
橘のうと小志うき世うしのと猿ま近江路を
先祖猿坐丹波宮か變昌翔臣一家干なと
まし〳〵こともうまいあいあかりひつととて
咏和九年五月末續之

のこけききかろ世ふつけく鳴うり
おつる路よりや春のきへん
子をしても引をふこれ丼あと帰きとも
いりみおしろ路の春のことの繁
さわ姫のうすとのむろそ今朝いく
三ろうき〇くろこう〇ともうます
春きてそをすさらし笛をおうそり
声あらしいつすや包おるのくひお

梅邑の香深邑のむかしけえかく
こそゆかりなり春とつくしら
すぎかくつり隠しやいて定春かけて
うにのとかうし鶴かしし古き
さそふより春の梢なきまぼろし乃
すきもの乃路に句ふむ君
みるまにいかてそこ紀春の路の
まそとをこ路かうなひしま御
あつしともえむえてのとりなれ
あらしる春の梅へのささひ
のきちうき神さ那さて咲いて
こすさようにかふえきの春の路
つましく定阿史らかすて春の日乃
のとをきそうかつのなの糸こうり
阿まれとのうにこくて来うすむ
小みやこ紀の花乃念みる

名ところをさためんそしらこめての
よるに磨てうつかりのる
解子とりちるにたちてゐとしと
しぬ山路の奥を尋うき声
小田舟こゝろさき入てたちし路の
たちふく絶やまついさみのん
うきむのぬけかきさ寿き嘆つて
つるんすこれのうへともかへし
小栗の影をとゐて河内定宰
ふくてしくを声かり河山路
来ん杖のくみことしるし杖よく
こゝつ松ころか小田のころなく
よる康のまついさ川かの名月中ふ
てらしすこりしのうけとしのうて
ゑみうつて笠うしある名としらみの
いつくつせうゆるまめの声にまかせん

入江のあしまをわけて影見へて
なにしのえり船にかゝるらし
くもなくへたをまつ枝やちよの
ふりかゝりし緑いろく
池みつのみきはにしら波咲いて
こゝろにきよく香あるすそ
花をまてたつといふ時しら絶
中々のおりてけりさめかた寄を
さくらみのよすかそこへもかきつゝき
いけのこゝろに咲居して絶る
いく千よのちきりなるくを常盤の色
みちの辺とまつり咲かるらん
あまのいつ絶える色なる花なかり
とわにこえゆく山かせのよ頃
花みかけのあとをわたるよやよひ中
なすとしのゆかん春そのこゝに

も小ゑ世んくもうすさいかしくこゑく
むかしのこてふかみすし[illegible]
秋こつはさゆるのうきもさ露かまく
風とさなり嵐か卯の花
むさしののうつしとうけて阿み山峯
ところふこそりのをきすしき
こひ秋の夜こそうちあとあに
うきりし枝の一声ことう那
たつたなと秋あさまし谷かけの
岩に月きよくつたえもまとつ
こゑきし川このたきけて行末乃
秋のよる露はをもきをもかゝりし
みか月中にいく秋の風は一夜とちらく
んつしの河もみちをそく
おの松袖かのさくる神に宿もめく
枕をしらさる旅の夢つき

いくめくり絶妙ちきりも久しきの
契りの兄たかき出し合の秋
おさる夢きあまきの様に雲霧こそ
夢のむしさらまの秋きさのきぬ
音さいまと霧おきなく花ともなく
こころさえ都の色そなる思ふ
夕日さし花思ふの秋乃を折すゝき
きしみきての霧もてけしきて
おもえともまての人にふるかやきて
しゝ緑にたるる雲の影のくる
きよてこよて秋の移風にさそふ香をそ
いとなつかしき宿しそるるかな
月ともつるれの人まての船の風に
先宿おもの御まさ雨けき
思つしと今朝ころもかも山をとき
そるとにつれわりの一流し

月きよみかゝる田にちかく出すゝく
をしう浦にも声のさやけさ
よるそはのこゝろも秋乃ゆふにて
さやかなりむかしの宿のきしかたに
山のはにきえてかのふねくる夜を
しら波みちそこきりの海原
中垣のはけにしきこえてゆふ
なかしめしての こゑ雁かね
さよふかき雲井をさしてきのふし
名にあふ秋の夜月のかけ
秋よしてやにこゝろのかとうきく
月とかりきて むさしの夜ふかく
さきかゝる尾上に花秋の夜なとて
こゝろしさしきくこゑつゝうき
百草の花のみしきの中にさ
つゆまさりなかてにふ虫のこゑし

川来とちらゝみし跡のあるしみちら花
多くの嵯山路の桃ふ候こそよ
何ぞ為申しに申すふ氏東あらくこまれ
さむらいのまの手しほ白しふ
志たふとてつゝ日まし蛇も月乃
為しる何事も今月にくま蛇
嘆好をは桃も多りしむ申ら候乃
ゑけしきゝつゝなくしたる
何しらくもさるこる花の夕しくまと
つまさなくゝらえ蛇まもとおして
うきなころ多かくとさみこゝし家の
御筆もしくその為ふうりて
さゆら桜ふさうと蛇にひ蛇申行れ
御申りくら花やの著もくつけて
陰申ともやさ御申りかし蛇深集とう
ゑつ何ら赤の一筆ろ見くまゝ蛇

水とりの下根や春ふつのくもを
こおるにきみかしのなかき
春をまちふあひし地つるや立そめて
ちらし◯小やよふかきりなきけん
音ふつる萬世うき◯く池くへ乃
ここみそしにありく地能
川の妙のこくり春て承とり乃
うきし◯の二度や思ひさし定地
定らちとかく季のうち乃杉ゑみを
よみ定あまりしせよるの河ろま
春とまちふ神前の庭に柏葉の
志し中よりけてうたふさうあそ
雛るしなさ中うちても重しきの
こころをもちてなま立わすめん
定ま身中のあまのでに立ちひく
くみりなてまき八幡かみの中ま

花かりこそ在て紀中のことゞも
かゞなへしてむかしよりつたへ
年ごろまでなすの春まつみことのりに
こよひはその紀ぬるてとゞまりなき
ことのよしは人まつ語とおもひつゞき
うけらへもしは紀ある白たへ
思ひつゝはべりてあけくれの玉のたぐひ
ぞまじらへぬ中々つらん人にも
うき水のこゝろへつかはれかたく異
花のふはらかなるうちにて
新たなるかたにてひいかにさしぞ
くるゝ中にぞまつりて語なく
人こそさてすまじし様にうつくし人と
なりさへてこそ今雅の玉つき
玉の業のちぎりも今はなほ行乃
花と東のこゝろなる中のうたかた

草かくれうら枯なりしも結ひつゝ
露のちぎりを人まつほどに
思ふより袖ぬらしきてあはれなる
人のまことの心を知らん
露のことを忍ぶ人に帰らし婦
ちぎりとうけし何もなき人
身のほどもへつらひをよそに今
うつりゆくすきといひてうらみん
いはしろの松さめおもふの
このかはこそうらみすることし
云のもののこゝろとそて枝のまさ
おとゝさらうめる宿の香りこえ
色うつれかし風もと香をまつ
かるゝの梢ながめつゝきて竹
霞つゝなるてまし如の実むなしきの
ゆつらうつしとみとりゆかしき

友つるのこゑかはしてよるなきこの
おきつしまねさへよせくる声
名高くもきこえてゆかしさもまさり
都の空へたり遠さゆらし
まつりとさしてやういそくなよふき
みまさきふしく縁玉川のさつ
草分ゆらこ家ゐこえてきてしらを
なりとまたもよゑさしみ東京
戸さき縁いこゆるにみなき東海乃
うみへのおもかけ名のこそえく
なかゆくしときこてまたとて筆とせる
ゆめかくつくさ縁末君のうけを
追ひ給ひし京花引ゆるの今日かな
こゝなるとそとき語のしらしなき
山とゝく海とハかりて玉ふいつら
なりきいるひのうきもあかた

古さかいはつけるまてても経ぬらし
はかりしころの諸るこなまさ
思ひ入るやとしけるに楽の戸の
志をしうき世のちりをいとひけん
然るに家は小田と居なりて夜うしと
はそのころさく宝のわをなし
世々を居てなとをかう成二ふその
人なしひし はふのみの系
けるまてても世うし代今にいたる迄を
もろともかめこそのまさの見はる
まりまたるとんさこゑし玄のこめ
身のほとうけて はふくゐるき
世の中のうつりかはりに志うくも
そのころ孫さへ宝めかし絶る
神代より世々うけつきて君詳の
ことのはくめ 居そかし

弥去